

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦い関連の記載についての考察（その1）

—関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況—

白 峰 旬

【要 旨】

これまで関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況については、日本国内の史料（日本側の史料）により検討されてきたが、イエズス会宣教師が当該期の日本国内の政治状況などを報じた『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況などが詳しく記されているので、本稿では『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の記載内容の検討をもとに、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況について考察する。

【キーワード】

イエズス会、関ヶ原の戦い、石田三成、徳川家康、豊臣秀頼

はじめに

これまでの関ヶ原の戦いに関する研究史では、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況については、日本国内の史料（日本側の史料）により検討されてきたが⁽¹⁾、イエズス会宣教師が当該期の日本国内の政治状況、布教・禁教の状況などを報じたイエズス会総長宛の日本年報、日本年報補遺などをまとめた『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況などが詳しく記されている⁽²⁾。この記載の中には、日本側の史料には見られない記載も多く含まれているので、本稿では『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の記載内容の検討をもとに、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況について考察したい⁽³⁾。

1. 豊臣秀吉の死去と秀頼の処遇（慶長3年）

関ヶ原の戦いに至る政治状況の起点になったのは、慶長3年（1598）8月18日の豊臣秀吉の死去であったことは周知であるが、秀吉が死去に際して、後継者である秀頼の処遇を託した経緯については「1598年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料1〕（I-3、105～106頁）

そして太閤様は、自分（亡き）後、a六歳になる息子（秀頼）を王国の後継者として残す（方法）について考えを纏めあげた。（中略）（徳川）家康だけが、日本の政権を篡奪しようと思えば、それができる人物であることに思いを致し、この大名（家康）に非常な好意を示して、自分と固い契りを結ばせようと決心して、彼が忠節を誓約せずにはおれぬようにした。

すなわち太閤様は、居並ぶ重立った諸侯の前で、その大名（家康）を傍らに召して、次のように語った。「予は死んでゆくが、しよせん死は避けられぬことゆえ、これを辛いとは思わぬ。（中略）b予は息子とともに日本全土の統治を今や貴殿の掌中に委ねることにするが、貴殿は、予の息子が統治の任に堪える年齢に達したならば、かならずやその政権を息子に返してくれるものと期待している。（中略）」と。（下線引用者）

このように、秀吉は自分の死去後の秀頼後継体制（下線 a）を確実なものとするため、最大の政敵であった徳川家康を豊臣政権内に封じ込める意図で「日本全土の統治」を一旦家康に託すものの、秀頼が国政を統治できる年齢に達した時には、政権を家康から秀頼に返すように、と諸大名の前で述べたのである（下線 b）。

秀吉のこの申し出に対して、家康は「王子（秀頼）への主権（の委譲）が安泰たるよう、その後見人として励もうと決心しておりましたが、（今や）殿は、国王（秀頼）御身、ならびに国家の命運をも拙者の忠誠に委ねられ、（中略）今後は万難を排し、あらゆる障害を取り除き、もって殿の御要望なり御命令を達成いたす覚悟であります」（下線引用者）（I-3、107頁）と答えた。この家康の返答は、秀吉の申し出を全面的に受け入れるものであり、「王子」であり「国王」である秀頼に対して、やがて主権（政権）を委譲することを誓った内容になっている。秀頼への政権委譲に関して尽力すべき点については、諸大名の場合も同様であり、「また列座の他の諸侯も皆同様に服従と忠誠の誓詞を差し出すことを要求され、彼らは太閤様の嗣子に対しては、嗣子が成人した後は、その政権を掌握できるように尽力することを、また家康に対しては、その間尊敬と恭順の意を表することを誓った」（下線引用者）、（I-3、107頁）と記されている。

つまり、家康にしても、その他の諸大名にしても、「国王」である秀頼が成人した後は、秀頼が政権を掌握することを所与の前提として規定されていたことになる。そして、「太閤様はその後、四奉行に五番目の奉行として浅野弾正を加え、一同の筆頭とした。次いで太閤様は、奉行一同が家康を目上に仰ぐよう、また主君（秀頼）が時至れば日本の国王に就任できるよう配慮すべきこと、すべての大名や廷臣を現職に留め、自分が公布した法令を何ら変革することなきやうにと命じた。」（下線引用者）、（I-3、107頁）と記されているので、秀吉は、秀頼後継体制への布石として、それまでの四奉行に浅野長政を加えて五奉行の筆頭とし、五奉行が家康を目上にして、しかるべき時期になれば秀頼が「日本の国王」に就任できるように命じたことがわかる。このように、秀吉死去の時点では、家康、諸大名、五奉行は、やがて秀頼が「日本の国王」に就任する、という将来的政権スキーム（枠組み）の中に束縛されていたのである。

2. 石田三成と浅野長政の対立（慶長4年）

秀吉の死去の翌年である慶長4年（1599）には、政権内部で石田三成と浅野長政の対立が起こった。石田三成と浅野長政はいずれも五奉行の一人であり、上述のように、秀吉が自分の死去間近に、それまでの四奉行に浅野長政を加えて五奉行の筆頭としたという経緯があった。慶長4年の政権内部での石田三成と浅野長政の対立については、「1599年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料2〕（I-3、120～122頁）

諸事情の大きな交替はまったく目まぐるしくなっている。なぜなら共同で統治している（十名の）人々の間での固い一致というのは滅多にないからである。そのため、a（石田）治部少輔（三成）と浅野弾正（長政）は〔彼らはこの時にあたって互いに外見上の友情を温めていた〕、ついに心に隠していた憎悪を爆発させた。同様に朝鮮で戦役を指揮していた重立った諸武将たちの間でも、朝鮮軍と和平を締結することについて、および軍勢を日本国へ引き揚げることにについて、皆が同意見ではなかったために不和が生じた。そのため国外で疎外と心の離反が起こったことは国内では驚くばかり（引用者注：に脱カ）増大した。

b 朝鮮において（小西）アゴスチノ（行長）に従っていた人々は、新たな盟約によって（石田）治部少輔（三成）と同盟した。これに対して他の派についていた人々は、浅野弾正（長政）の側に合流した。そのため貴人や重立った人々は多くの激しい抗争によって分裂し、互いに新たな敵意を燃え立たせるのであった。（小西）アゴスチノ（行長）の側には（石田）治部少輔（三成）と、彼自身のすべての家臣や友人たち、有馬と大村の国主たちとその家臣と友人たち、薩摩の王（島津義弘）、柳川殿と筑後の他の諸侯であり、彼らの中には我らの味方（小早川）藤四郎（秀包）殿、それに長崎奉行で他の地の領主である寺沢（広高）殿が挙げられる。これらの人々の敵側は、大いなる権勢をもっており、浅野弾正（長政）殿、（加藤）主計（清正）殿〔彼の所領は、肥後の国の半分を占めており、（小西）アゴスチノの所領と境界を接し、浅野弾正は小西アゴスチノと大いに不仲である〕、（黒田）甲斐守（長政）、豊前の国の国主（黒田孝高）、市正（片桐且元？）⁽⁴⁾、それに肥前の国主鍋島（勝茂）がいた。そのためこの両派は、もはや憎しみを隠さず互いに反目していた。そして彼らは都〔ここに国主たちの居所がある〕に到着すると、互いに批判を開始し、それに諸々の罪のなすり合いをし、そのうえ浅野弾正（長政）派は、全力を注いで自分の敵側の者を打倒しようと努めた。
c そして（徳川）家康その他の大名たちは、皆が敵対心を捨てて固い友情が結ばれるように何も試みないわけではなかったが、（小西）アゴスチノ（行長）に有利に奉行所から宣告が下される以前には、彼らは何も推進させることはできなかった。しかし浅野弾正派の人々はそれで黙るべきではないと判断し、自分の意見の方へ他の重立った者、および特に主君の側にいるのを常としていた人たちを引き入れるに至ったので、ついに日本国のすべてが内乱に燃え立ち始め、これによって日本国の変革が恐れられていた。（下線引用者）

こうした石田三成派と浅野長政派の両派の対立の経緯を見ると、当初は石田三成と浅野長政は表面上は友好関係（「外見上の友情」）を保っていたが、「憎悪を爆発」させて激しい対立状態になったことがわかる（下線 a）。石田三成と浅野長政が「憎悪を爆発」させた理由や時期については具体的に記されていないが、両者ともに五奉行の中では実力者であったことがその要因の一つと推測できる。

両者については、「日本国の統治者である（石田）治部少輔（三成）と浅野弾正（長政）〔彼らは十名（の統治者）の中にあり、身分の高い者である〕が、同僚たち一同の一致した意見に基づいて朝鮮戦役を終結させ、軍勢を日本国へ帰還させるために都から下へ到着した時、（後略）」（I-3、120 頁）と記されていて、「日本国の統治者」である石田三成と浅野長政は 10 人（五大老、五奉行）の中でも「身分の高い者」であって、朝鮮半島から諸将を帰国させるため共に九州へ来たことがわかる。上述のように、浅野長政は、秀吉の死去の間に秀吉の命により、それまでの四奉行に加えられて五奉行の筆頭となったが、それ以前は秀次事件に連座して慶長元年（1596）5 月に失脚していたので（I-2、292～293 頁）、政治的には今回復権したが、それまでは空白期間があったことになる。浅野長政が復権するまでの期間に四奉行の中心となっていたのが石田三成であったので、その点では、復権して五奉行の筆頭になった浅野長政と、それまで四奉行

の中心であった石田三成との間に政治的確執が出来たとしても不思議ではなかった。

五奉行の有力者である石田三成と浅野長政の対立について、両派（下線b）の構成は、石田三成派は、小西行長、有馬晴信、大村喜前、島津義弘、立花宗茂、小早川秀包、筑後国内のその他の諸大名（高橋直次、筑紫広門カ）、寺沢広高であり、浅野長政派は、加藤清正、黒田長政、黒田孝高、市正（片桐且元カ）、鍋島勝茂であった。

石田三成派は、小西行長が有力なキリシタン大名であり、有馬晴信、大村喜前、小早川秀包もキリシタン大名であったことや、文禄の役では、有馬晴信、大村喜前は小西行長（一番隊）の指揮下にあったことも同じ派になった要因として考えられる。石田三成は、小西行長の「特別の親友」（I-3、120頁）であったことから、石田三成派は、石田三成・小西行長派と言い換えてもよいであろう。小西行長は寺沢広高と「親しくしていた」（I-3、128頁）ことから、この時点では、寺沢広高は同じ派になったと思われる。ただし、後に寺沢広高は家康に近い立場になり、石田三成派からは離れることになる⁽⁵⁾。

浅野長政派については、浅野長政が石田三成派の中心人物である小西行長と「大いに不仲」（I-3、121頁）であったことも敵対する要因の一つであったと考えられる。また、加藤清正は小西行長の「不倶戴天の敵」（I-1、274頁）であったことから、浅野長政派に入っていたと考えられる。鍋島勝茂が浅野長政派に入っている点については、文禄の役で鍋島直茂が加藤清正（二番隊）の指揮下にあったので、そのことが鍋島直茂の嫡子勝茂が加藤清正と同じ浅野長政派になった要因と思われる。

その後、両派の反目・対立はさらにエスカレートし、「内乱」（I-3、122頁）が危惧されるまでになったが、この両派の対立に家康は関与しておらず、両派の調停を試みようとしていた点は注目される（下線c）。つまり、慶長4年の権力闘争の発端は豊臣政権中枢における五奉行の内部における有力者同士（石田三成と浅野長政）の過激な対立が始まりであった、ということになり、この点（石田三成と浅野長政の対立）は日本側の史料には記載されていない点なので重要である。なお、石田三成と浅野長政の対立がおこった時点では、外様の立場の家康は関与していなかったという点は注意すべきである。

3. 石田三成の家康に対する非難と石田三成の失脚（慶長4年）

しかし、その後は、石田三成が家康を公然と非難する局面があらわれた。前掲〔史料2〕の次の記載には以下のように記されている。

〔史料3〕（I-3、122頁）

a (石田) 治部少輔 (三成) は (徳川) 家康に対して公然と反対を唱え始め、次のように非難を浴びせた。国家の統治にあたってひどく権力を我がものにしており、また天下の支配権を獲得する魂胆の明白な兆候を示していると。そこで、(石田) 治部少輔は武器を取り、b 他の統治者たちの意見に従って、使者たちを (徳川) 家康のもとへ遣わし、予のことで何が気に入らぬのかと公然と詰問させた。(徳川) 家康はすべての点について穏やかに弁明し、己が行為についてなした非常に立派な諸理由を述べた。しかし彼は無防備のまま対面することはせず、c 己が諸国から三万の軍勢を招集し、これによって敵方の力に対してなしたc 最大の兵力をもって固めた。(下線引用者)

石田三成の家康に対する非難の主張は、「国家の統治にあたってひどく権力を我がものにして」いることと、「天下の支配権を獲得する魂胆の明白な兆候」を示していることであった（下線a）。つまり、五大老の一人である家康が、国家統治にあたって権力を私物化し、天下取りに対する明

白な兆しが見えると非難したのである。

こうした非難を石田三成が公然とおこなうことができた点からは、慶長4年のこの時点では家康と石田三成が対等の関係にあったことがわかったとともに、この時点で家康が石田三成の対立軸として出てくることに注意したい。また、この時点では、家康を除く四大老・五奉行（「他の統治者たち」）は石田三成のサイドに立っている点（下線b）に注意したい。

そのほか、家康の領国からの最大動員兵力数が3万という点は（下線c）、翌年の関ヶ原の戦いにおける家康の領国からの動員可能な兵力数を考慮するうえで重要である。

石田三成が公然と家康を非難し、使者を派遣して詰問したことについては、通説では慶長4年正月19日に石田三成ら五奉行が、家康を除く前田利家ら四大老と諮って使者を派遣し、私的婚姻を詰問したことが該当する⁽⁶⁾。

その後、石田三成は政治的に失脚することになるが、そうした経緯については「1599年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料4〕（I-3、123～125頁）

a 時が経つにつれて、（石田）治部少輔のもとを離れた軍勢や武将たちの数の増大によって家康は強大になり、b 勝利者のように、こう言うようになった。（石田）治部少輔が故国の礼儀に従って切腹をしない限り、その他の方法によって日本国が平穏になることはできぬ、と。（中略）

c ついに家康は、太閤様の息子である主君（秀頼）が住んでいた大坂城を占拠した。しかも彼は、このことを心中の意図によって非常に狡猾にやっしまい、そのため奇襲攻撃を受けた援軍に来ていた敵方には防衛の余裕を与えなかった。d（大坂）城から遠くない邸にいて、六千の武装した軍勢に護られながら夜を過ごしていた（石田）治部少輔は、この思いもかけぬ不幸を阻止することができなかった。d（石田）治部少輔はこの窮地に追い込まれると、同僚の統治者たちの権力下にあった伏見の城へ赴いた。（小西）アゴスチノは、以前受けた太閤様の恩義を裏切らぬように彼の後について行くことに決めた。なぜなら（小西アゴスチノ）は、そのために死を覚悟せねばならぬとしても、汚名の印しなしに己が友（石田）治部少輔のもとを去ることはできまいと判断したからである。e とりわけこの派は、太閤様が制定した統治の秩序が、取り繕われた所として存続するために活動していると考えられていたからである。しかし、家康は、伏見の城への出発を遅らせるべきではないと考えた。彼は軍勢を率いてそこへ到着すると、諸侯の勧めを入れて次の条件で兵力を撤退させることを約束した。f すなわち（石田）治部少輔は、これまで帯びていた官職を捨てた身分に落とされ、今後は国家統治の任を離れ、己がすべての軍勢とともに自領である近江の国にずっと引き籠っているように、と。（中略）g それゆえその後彼はしきりに（小西）アゴスチノと親交を結び、大いに好情を示した。（中略）

これによって日本国の政情は非常に平和になったが、（石田）治部少輔の敵方は、沈黙しておれなかった。彼らはこの者（石田治部少輔）が最高の荣誉の位階を追放されたことでは満足せず、のみならずこの男自身に対する災難、h それどころか殺害が仕組まれることさえ恐れなかった。（中略）確かに日本国にいる人たちの誰一人として、この当時貴人諸侯の反目が鎮圧されようとは、いかようにもその可能性を考えている者はなかった。他方諸侯の心の中には憎悪が包含されたままであった。なぜなら（日本）国の統治において、i 家康の同僚であった四大老は、家康自身が日本国全土の支配を手に取りめて国家の相続権を自らのもとに留めておきはしないかと、このことを極力警戒したからである。（下線引用者）

その後、石田三成派の大名の数が減少した一方で家康の権勢は強大になり（下線a）、〔史料3〕

の下線 a の記載にあった当時（慶長 4 年正月）のような家康と石田三成の対等な関係は成立しなくなっていた。こうした状況を背景にして家康は「日本国が平穩」になるためには石田三成が切腹をする必要があると述べた（下線 b）。

下線 c は家康の大坂城入城に関する記載であり、この記載の時系列では、石田三成の失脚（通説では慶長 4 年閏 3 月 4 日⁽⁷⁾）以前のことになっている。しかし、通説では、家康の大坂城西の丸入城は慶長 4 年 9 月 28 日⁽⁸⁾であるので、通説よりも約半年以上早いことになるが、この点は「1599 年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）の単なる錯誤なのかどうか、という点を含めて今後検討する必要があるだろう。なお、下線 c において、秀頼について「主君」と表記していることは、この時点では秀頼が日本国の主君であり、家康は主君である秀頼よりも下の地位（後見役）にあったことを明確に示している。

石田三成の失脚の記載（下線 d）については、通説では、石田三成は当初大坂にいたが、その後、伏見に移った、としている点⁽⁹⁾と同様である。しかし、石田三成が伏見に移った理由が、家康の大坂城入城のため、としている点は通説と異なる（通説では、豊臣系の武断派七将による大坂の石田三成邸襲撃のため、としている⁽¹⁰⁾）。下線 d における「同僚の統治者たち」というのは、五大老・五奉行の中で石田三成に近い立場の者たち（複数）という意味に考えることができ、大坂にいるよりは伏見城に入城した方が石田三成にとっては安全であるという認識があったのであろう。

下線 e は、石田三成・小西行長派の政治的スタンスが明確にわかる点で重要であり、石田三成・小西行長の派は、秀頼を主君とする豊臣体制の堅持を目的として結束し活動している、という意味と思われる。

下線 f は、石田三成の奉行職辞職と居城の佐和山城への蟄居のことを指しており、通説では慶長 4 年閏 3 月 4 日のこととしている⁽¹¹⁾。

石田三成の失脚後、家康が小西行長に接近したことは（下線 g）日本側の史料には見えない内容であり注目される。小西行長が石田三成の盟友であった点を考慮すると、家康が石田三成の失脚を好機ととらえて、石田三成と小西行長の関係を分断して、小西行長を自分の派に取り込もうと工作したと見なすことができる。この点については、「1599～1601 年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』 I-3、243～244 頁）に詳しく記されており、「（石田）治部少輔追放後、内府様は（小西）ドン・アゴスチノを己れの味方に引き入れようと努めた」（I-3、243 頁）としている。

下線 h は、石田三成に敵対する勢力（具体的な名前は記載されていない）による石田三成の殺害計画が存在したことを示唆するような内容である。このことは、慶長 4 年閏 3 月 3 日の豊臣七将による石田三成襲撃事件（大坂の石田三成邸を襲撃）⁽¹²⁾を指すようにも見えるが、〔史料 4〕の文脈上では、石田三成の失脚（通説では慶長 4 年閏 3 月 4 日）後の出来事として記されているので時系列としては整合しない。

下線 i は、家康以外の四大老（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝、前田利長）が家康の政権篡奪の野心を警戒していた、という内容であり、四大老 VS 家康という対立軸である。このことは、家康の政治的野心を警戒していたのは石田三成だけではなかったということを明確に示すものであり、関ヶ原の戦いに至る権力闘争の対立軸を考えるうえで重要である。

〔史料 5〕（I-3、146 頁）

日本国の情勢に関して言えば、多くの人々が希望している堅固さを、すべての者が保持しているわけではないが、a 当分は何ら著しく事情が変化する恐れはないであろう。なぜなら日本国のすべての諸侯は太閤様に非常な恩義を受け、b そしてまた現在七歳の彼の嗣子（秀

頼）のために、国家を保持するため驚くほど心配しているので、家康が太閤様の遺命によってすべてを統治している限りは、彼らは家康に快く服従するだろうからである。 c しかしもし彼が専主の地位を獲得しようと努め、皆が彼一人に抵抗したとしたら、このために日本国全土は非常に苛酷な戦さによって燃え上がるであろう。（下線引用者）

この記載（「1599年度日本年報」、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）は、石田三成失脚後における日本の政治状況を記していると考えられる。この時点では、当分は政治状況の激変はないであろう、としているが（下線a）、それは秀吉の遺命を受けた家康が秀頼を推戴して統治する限りは諸大名はその体制におとなしく従っているからである（下線b）としている。しかし、家康が「専主」（専制君主の意味か？）の地位を得るために、（秀頼を排除して）天下取りをおこなおうとした場合は、諸大名は家康と対立して「日本国全土は非常に苛酷な戦さ」がおこることになる（下線c）、としている。

このことは、諸大名は秀頼を中心に国家を保持していくことに従っており、家康が秀吉の遺命によって秀頼の後見役として統治することを認めてはいるが、家康が秀頼を排除して最高権力を掌握しようとするれば、家康に抵抗して日本全土で戦争がおこる、ということを示している。つまり、諸大名は秀頼を主君とする豊臣体制の堅持を是認しているのであって、家康を新しい主君とする国家体制は認めないということになる。この点は、慶長4年の政治状況（石田三成失脚後）として重要であり、同年の政治状況（石田三成失脚後）が表面上平穏に見えるのは、家康が天下取りの政治的野心を抑制して秀頼を主君として推戴している限りは平穏である、という条件付きなのであって、この時点ですでに家康の政治的野心が想定されていた点は注意すべきであろう。そして、家康が天下取りをおこなおうとした場合に全国的戦乱が想定されていた点は、翌年（慶長5年）には現実の問題となるのである。

上記の〔史料2〕～〔史料5〕は、「1599年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）に記載された内容であり、この年報は「1599年10月10日付、日本発信」であるので（I-3、115頁）、1599年10月10日（グレゴリオ暦）を和暦に換算すると慶長4年8月21日であるから、上記の〔史料2〕～〔史料5〕は、それ以前の慶長4年における出来事ということになる。

4. 石田三成などによる家康に対する陰謀の画策（慶長4年）

家康と対立する石田三成などによる、家康に対する陰謀の画策に関して、「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料6〕（I-3、168～169頁）

a 天下や君主国の統治は、多くの頭目や異なった意見に依存するものであるから、奉行らの間で或る者が他の者よりもさらに強力である場合、長期にわたって統一を保つことは不可能であると常に判断された。それゆえ（太閤様が亡くなって後）しばらくは（世の中は）平穏に渉ったにしても、b 内府様（徳川家康）はともかく非常に強力で、その政庁における首位の座を占め、いとも絶対的であり、命令し、すべてを治める唯一の人物となった。それによって、c 他の者たちが、彼に大いなる反感を抱き始め、一体化し、彼と衝突するための陰謀を準備した。とりわけ、d このことにあたったのは、三ヵ国の国主（前田）肥前（利長）殿、また非常に強力な国主（上杉）景勝で、両者とも有力奉行（大老）であった。そしてより下級奉行には、e この陰謀のもっとも主要な張本人である（石田）治部少輔（三成）がおり、彼には、その親友であることから（小西）ドン・アゴスチノ（行長）が大いに賛同した。（中略）

ついに互いに非常な軋轢^{あつれき}を生じた後、大混乱となり、f 内府様が（石田）治部少輔を政庁から追放して近江の彼の城（佐和山城）に蟄居させることで結着をみた。 gそして（前田）肥前殿と（上杉）景勝と、その他の領主たちは各々がその領国へと立ち去った。（小西）ドン・アゴスチノもそのようにし、彼は肥後の自国に戻った。そして内府様は己が意のままに天下の統治を行ない、（一五）九九年の大部分と（一）六〇〇年にかけては、ほとんど絶対君主のようになった。（下線引用者）

下線 a の記載は、秀吉死去（慶長 3 年 8 月 18 日）後の政治状況を述べたものであり、「多くの頭目や異なった意見に依存するもの」というのは、五大老・五奉行による集団指導体制のことを指している。「奉行らの間で或る者が他の者よりもさらに強力である場合」というのは、この文において「奉行ら」= 大老たち、という意味で使用されているので、「或る者」とは家康を指すことは明らかである。よって「奉行らの間で或る者が他の者よりもさらに強力である場合、長期にわたって統一を保つことは不可能であると常に判断された」というのは、大老である家康が他の大老よりも強力であるため、五大老・五奉行による集団指導体制は長く続かないことが予想された、という意味になる。

そうした家康の専横（下線 b）に対して、他の大老たちが家康に強い反感を持ち、連携して、家康と「衝突するための陰謀を準備した」としている（下線 c）。この場合、家康と「衝突するための陰謀」とは、政治的衝突だけでなく軍事的衝突も含めてのことと考えられ、「陰謀」を画策したということは、政治的衝突・軍事的衝突の結果、家康を中央政界から追い落とす目的であったことは明らかである。家康と「衝突するための陰謀」を画策したということは、現状のままでは家康を中央政界から追い落とすことは困難なので、現在の政治状況を劇的に変更する必要があったためであろう。

下線 d は、家康と「衝突するための陰謀」を画策した人物が、五大老の前田利長と上杉景勝であることを明記しており、上杉景勝について「非常に強力な国主」と記しているのは軍事的な精強さを示すものであろう。そして、この「陰謀」に関与したのは、前田利長と上杉景勝だけでなく、石田三成が「この陰謀のもっとも主要な張本人」であり、石田三成の「親友」である小西行長がこれに同調した（下線 e）。つまり、家康 VS 前田利長・上杉景勝・石田三成・小西行長という対立軸であり、石田三成がこの「陰謀」の首謀者であった。

上述のように、石田三成が家康を公然と非難し、使者を派遣して詰問したことがあったが（慶長 4 年正月 19 日）、この時点では前田利家はいまだ存命中であった。前田利家の死去は慶長 4 年閏 3 月 3 日であり、〔史料 6〕では、前田利長が「三ヶ国の国主」と記されているので（下線 d）、〔史料 6〕の記載内容は、前田利家死去後のことと考えられる。〔史料 6〕では、この陰謀画策の後に、石田三成が失脚して居城である佐和山城に蟄居した（下線 f）ことになっているが、通説では石田三成の失脚と佐和山城への蟄居は慶長 4 年閏 3 月 4 日であるので、時系列としては整合しないため、この陰謀画策は石田三成の失脚後におこったことと考えられる。

そして、陰謀画策の後に上杉景勝は帰国した（下線 g）ことになっており、上杉景勝の帰国の時期については、慶長 4 年 8 月上旬以前に伏見を発ち、9 月上旬までに国許（会津）へ到着した、という指摘があるので⁽¹³⁾、陰謀画策は 8 月上旬以前ということになる。

以上の諸点を勘案すると、この陰謀画策があった時期は、慶長 4 年閏 3 月 4 日以降、同年 8 月上旬以前ということになる。この陰謀画策について注目されるのは、反家康として五大老の前田利長と上杉景勝が新たに登場したことであり、以前から反家康の立場であった石田三成とその「親友」(下線 e)である小西行長のラインに前田利長と上杉景勝が結びついた形になったことである。当時、石田三成は失脚中であったが、反家康の勢力に前田利長と上杉景勝が加わったことは、反

家康の勢力が拡大したことを示している。特に反家康の勢力に上杉景勝が入ってきたことは、翌年の関ヶ原の戦いへの伏線として重要な意味を持つことになる。

5. 反家康勢力の連携と家康に対する「武略」（慶長5年）

慶長5年（1600）になると、反家康勢力の連携は具体的な動きを見せ始めた。その点については「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料7〕（I-3、241～242頁）

このころ、全諸侯はすでに政庁に復帰していたが、若干、例外があった。それは依然として自領に留まっている肥前殿、もう一人は（上杉）景勝という別の領主である。景勝は上級奉行（大老）の一人であるばかりか、日本でもっとも強力な諸侯の一人でもあって、その領国の東部は内府様のそれに接している。a（上杉）景勝は、三年間は領内に留まってもよいとの太閤様の許可を得ていると弁解し、政庁へは赴くまいとの決意を固めた。bこの領主は、（石田）治部少輔のごく親しい友人であるが、内府様とは不仲であったので、内府様はその決意をきわめて遺憾に思った。（上杉）景勝宛に、貴殿がただちに上洛しないなら、自ら出陣し、貴殿を反徒として懲罰するであろう、との伝言を送った。ところが、cこの景勝はきわめて勇敢な武將で、（石田）治部少輔や（前田）肥前殿、その他内府様に良からざる領主たちと密かに気脈を通じ連携を保っていたので、内密に、これ以上はありえぬほど巧妙な策略〔日本ではこれを武略と呼ぶ〕をめぐらした。その策略として、景勝が書状で内府様など物の数ではないとの態度を示して内府様を挑発し始めた。そこで内府様は、自ら（上杉）景勝討伐に赴かざるを得なくされた。d内府様は、すべてはわが手中に確保されているものと判断して、麾下の全軍を率いて行こうと決意した。（中略）内府様は急いでいたし、全員がただちに後続するものと考えていたので、自信をもって全兵力を率いて関東に向かった。e幾人かの奉行は内府様に従ったが、その歩みは緩慢であった。その一人は（石田）治部少輔の城を通過する時に彼と連絡をとり、かねて仕組んでおいた計略を明らかにしようとして決意した。そこで後からやって来た者たちと談合し、全員大坂へ帰ることで一致しすぐに行動した。このようにして、たちまち両者の関係は決裂して、f日本のほとんどすべての諸侯の間に、内府様に背反する同盟が結成された。重立った奉行、および大坂にいた三名の奉行も彼らと合流し、彼らと一致団結し、内府様に敵対する立場を明らかにして内府様を政治から放逐した。g彼らは内府様に自らの領国に留まるようにとの伝言を送り、h幼君秀頼様に対し、またその父君太閤様の命に背き犯した数々条の罪状をつきつけた。

iこの同盟に参加していた者たちの重立った者は、（小西）ドン・アゴスチノ（行長）と、その親友（石田）治部少輔であった。両名は非常な勇気と智略に富み、太閤様から賜わった大いなる恩義を感じていた。太閤様は存命中、この兩人に対して深い愛情を常に抱いていたし、両者が大領主になったのも太閤様のおかげであったからである。したがって両者にとり、j太閤様の若君（秀頼）が、内府様のために世襲封土を剥奪され、榮譽や身分の点で毀損を被ることに我慢がならなかった。このために両者は、若君に対する忠臣として、どうしたらその身分を今までどおり留めることができるか、絶えず心を労してきた。kそして両者は、この一点につき諸大名と談合の結果、最終的にこの同盟を結ぶに至った。その成否はかかってかの策略にあったが、日本の政治史においてこの同盟くらい入念に仕組まれたものはなかった。lこれによって大いなる名声と榮譽が、殊にかの二人の領主に帰したのであった。

(下線引用者)

下線 a は上杉景勝の上洛拒否に関する記載である。下線 a における「政庁」とは、「都と呼ばれる政庁のある都市」(I-3、226 頁)という記載から、伏見城のことを指すと考えらる。上杉景勝の上洛拒否問題が、家康による上杉討伐⁽¹⁴⁾の原因になったのはよく知られている。下線 b は上杉景勝が石田三成の「ごく親しい友人」であった一方で、景勝は家康とは「不仲」であった、という記載であり、上杉景勝のその後の動向を考えるうえでこの人間関係は重要である。

上杉景勝が、石田三成、前田利長⁽¹⁵⁾、その他の反家康の諸大名と「密かに気脈を通じ連携を保っていたので、内密に、これ以上はありえぬほど巧妙な策略〔日本ではこれを武略と呼ぶ〕をめぐらした」(下線 c)という記載からは、反家康の秘密同盟がいかに大がかりなものであったかを知ることができる。この記載からは、①反家康の首謀者は上杉景勝、石田三成、前田利長であり、それ以外にも反家康の諸大名が存在した、②この反家康の同盟は、この時点では家康側に対して内密にされていた、③この反家康の同盟が準備したのが「これ以上はありえぬほど巧妙な策略」であり、換言すれば当時の日本で「武略」と呼べるものであった、ということが具体的にわかる。

上述のように、上杉景勝が石田三成の「ごく親しい友人」であった点と、上記①のように上杉景勝と石田三成は共にこの反家康の秘密同盟の首謀者であった点を考慮すると、石田三成と上杉景勝の事前盟約は存在した可能性が高いことになる。

「これ以上はありえぬほど巧妙な策略」(下線 c) = 「武略」(下線 c) とは、何を指すのかを考えると、「武略」は「戦争上の詭計と策略」⁽¹⁶⁾ という意味なので、「これ以上はありえぬほど巧妙な策略」には軍事的オプションが含まれていることは明らかである。

下線 d は、家康が自信満々に上杉討伐に向かったことを記しているが、このことは同時に、反家康の同盟が準備した「これ以上はありえぬほど巧妙な策略」に対して家康が全く気付いていないことも示していた。

上杉討伐に関して、家康は慶長 5 年 6 月 16 日に大坂を發して伏見に入り、同月 18 日に伏見を發って江戸へ下向したので⁽¹⁷⁾、次の下線 e の内容は、慶長 5 年 6 月 18 日より後の出来事になる。

下線 e は、反家康の同盟が準備した「これ以上はありえぬほど巧妙な策略」の具体的内容が記されている。上述のように家康が上杉討伐に向かった後、何人かの奉行(五奉行のうち何人かの奉行)は上杉討伐に向かうことに表面上は従ったが、サボタージュするかのようその行軍速度は遅く、奉行のうち一人は、石田三成の居城である佐和山城を通過する時に三成と連絡を取り、事前に準備していた「計略」を実行しようと決めて、後続の「者たち」(反家康の諸大名を指すと考えられる)と相談して、これらの者が皆、上杉討伐に向かわずに、大坂へ引き返すことをすぐに実行した。つまり、家康には先に上杉討伐に向かわせておいて、反家康の諸大名(五奉行のうち何人かの奉行が含まれる)は上杉討伐には向かわず、佐和山から大坂に引き返したのである。

下線 f は、「日本のほとんどすべての諸侯」の間に反家康同盟が結成され、「重立った奉行」と「大坂にいた三名の奉行」も反家康同盟に合流して、家康に敵対する立場を明確にした、としている。この記載からは、反家康同盟に加わった諸大名の数がいかに大規模だったか(「日本のほとんどすべての諸侯」)がわかり、豊臣政権の中枢も家康に敵対する立場を明確にしたことがわかる。対立の図式としては、家康 VS 豊臣政権の中枢 + 日本のほとんどすべての諸大名ということになり、家康に味方した大名はほとんどいなかった、ということになる。

この場合の豊臣政権の中枢とは「重立った奉行」と「大坂にいた三名の奉行」であるが、「重立った奉行」とは毛利輝元と宇喜多秀家の二大老を指し、「大坂にいた三名の奉行」とは増田長盛、長束正家、前田玄以の三奉行を指すと考えられる。石田三成は居城の佐和山城(近江)に蟄居中であったし、浅野長政は慶長 5 年 4 月 12 日に江戸に下っている⁽¹⁸⁾、五奉行のうち残りの 2

人については、当時、大坂にいなかったことは確実である。

家康に対するこうした動きは、政治的には家康を豊臣公儀から完全に排除したことを意味しており、「内府様を政治から放逐した」⁽¹⁹⁾（下線 f）というの、そのことを指している。この点については、「1600 年度日本年報補遺」（I - 3、305 ~ 306 頁）にも「日本国全土の奉行であった諸侯は、〔年報で報告したように〕、内府様〔^{ダイフサマ}（徳川）家康は自分にはこの名を好んだ〕に対する同盟を互いに結び（中略）共同の敵（引用者注：家康）に対しては国家のすべての政務から閉め出して（後略）」と記されている。「日本国全土の奉行であった諸侯」（上述した二大老と三奉行に石田三成を加えた構成と考えられる）は、家康を「共同の敵」として、家康を「国家のすべての政務から閉め出し」たことが明記されている点は重要である。

そして、下線 g では、家康に対して「自らの領国に留まるようにとの伝言」を送った、としているが、この点は日本側の史料には見られない点であり注目される。家康は上杉討伐の中止後、8月5日に江戸に戻り、8月中は江戸に留まっているので（江戸を出陣するのは9月1日）⁽²⁰⁾、家康自身の行動とも符合している。このように豊臣政権から家康に対して江戸に留まるように、と命じていたとすると、家康が8月中は江戸から動けなかった理由が明確に理解できる。その意味では、家康は江戸から動けなかったのではなく、動けなかったということになる。また、上杉討伐中止の理由として、このことに関係付けて考えることも可能であろう。

下線 h における「数カ条の罪状をつきつけた」は、7月17日に大坂三奉行が出して家康を弾劾した「内府ちかひの条々」のことを指す。下線 h で重要なのは、家康が「幼君秀頼様」に対して、また「その父君太閤様」（豊臣秀吉）の命に背いた、としている点であり、家康が豊臣政権の敵になった、ということを確認したことになる。「幼君」とは「おさない主君」⁽²¹⁾ という意味であるから、この時点での主君は豊臣秀頼であり、家康はその敵になったことが諸大名に対して周知されたのである。よって、マクロな意味では、豊臣公儀の主君豊臣秀頼 V S 豊臣公儀から排除された豊臣公儀の敵である家康、という対立軸になる。

反家康同盟の首謀者は、小西行長と「その親友」の石田三成であり（下線 i）、その目的が、家康の政治的野心により、豊臣秀頼が秀吉から継承した地位を毀損・失墜させる恐れがあることに危機感を感じていた（下線 j）ことによるものであった。家康の政治的野心については、「内府様が政権をとった時には、自分たちは必ず内府様を助け、その陣営に立つであろうという内容」の「誓約」を「内府様は、日本の他の諸侯から徴した」（I - 3、243 頁）と記されているので、家康の政権獲得への意欲は明らかであったと言えよう。

家康の政治的野心に対する危機感を石田三成・小西行長が、諸大名と共有することによって、反家康同盟を結成し、反家康同盟の目的が達成できるか否かは、上述した「策略」（「武略」）がうまく実行できるかどうかにかかっていたが、「日本の政治史においてこの同盟くらい入念に仕組まれたものはなかった」としている（下線 k）、反家康同盟が以前から周到に準備されたものであることがわかる。

下線 l は、反家康同盟の首謀者である石田三成と小西行長に「大いなる名声と榮譽」が与えられた、というものであり、当初は反家康同盟の目的が達成され、家康打倒が成功する可能性が高かったことを示している。その傍証として、①小西行長について「戦う少し前には、彼は勝利を掌中に収めるかに見えたので（後略）」（I - 3、277 頁）と記載されている、②「内府様に背反する同盟が露顕すると、日本国中の諸侯のほとんどがそれに加わっていたので、多数の諸侯はただちに軍兵を率いて大坂の政庁（引用者注：大坂城）に集結した。その数はわずかの間に十万を超えた。」（I - 3、248 頁）と記載されていて、反家康方の軍事動員が成功し、10万を超える軍勢が大坂城に集結したことがわかる、③家康方の留守将が籠城していた伏見城を攻略後、「諸奉

行は完全に天下の主となり、きわめて大きな権力を掌握するに至った」(I-3、249頁)と記載されていて、石田三成などが天下を完全に掌握したことが明記されている、などの点が指摘できる。

※以下、『史学論叢』45号(別府大学史学研究会、2015年)に続く。